

## 2020年7月NHK近畿地方放送番組審議会

7月のNHK近畿地方放送番組審議会は、15日(水)、NHK大阪拠点放送局(ウェブ開催)において、10人の委員が出席して開かれた。

会議では、事前に視聴してもらった、かんさい熱視線「増え続ける“湯かん”～家族に寄り添う 最後の時間～」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、8月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

### (出席委員)

- 委員長 篠 雅廣(大阪市立美術館 館長)
- 副委員長 帯野久美子(関西経済同友会 常任幹事)
- 委員 黒木 麻実(公益社団法人 全国消費生活相談員協会  
関西支部副支部長)
- 佐伯 順子(同志社大学社会学部 教授)
- 笹岡 隆甫(華道 未生流笹岡 三代家元)
- 鈴木 元子(杉本や編集処 編集者)
- 添田 隆昭(総本山金剛峯寺執行長・高野山真言宗  
宗務総長・高野山学園理事長)
- 平田オリザ(劇作家・演出家)
- 堀江 尚子(認定NPO法人 くさつ未来プロジェクト 代表)
- 矢崎 和彦((株)フェリシモ 代表取締役社長)

### (主な発言)

<かんさい熱視線「増え続ける“湯かん”～家族に寄り添う 最後の時間～」

(総合 6月19日(金))について>

- テーマにも映像にも衝撃を受けた。“湯かん”のことは初めて知ったが、亡くなった人の50%以上が葬儀の際に“湯かん”を行っているということや、湯かん師を目指す若者が多いことや、仕事に携わる若者の純粋な気持ちに驚いた。葬儀は、遺族のための儀式であるとともに、亡くなった方にとっても生と死をつなぐ重要な儀式だと感じられ、葬儀のありようはこれからも変わるのではないかと感

じた。これまで遺体を撮影することなどはタブーだと思っていたので、こうしたテーマを取り上げたことに関心を持った。

- 今や葬儀のあり方も多様化しているが、“湯かん”をすることが増えていることや、湯かん師を目指す若者が多いことを意外に思った。番組を見ていて、“湯かん”は亡くなった人のためというよりは、残された遺族のための儀式と感じた。病院の看護師によるエンゼルケアで十分だと思っていたが、「少しでも安らかな顔にしたい」と思う遺族にとっては必要なことだと思った。映像はショッキングだったが、とてもよい番組だった。
- 病院での死、看護師によるエンゼルケア以外にも死者の見送り方があることを知った。死者との別れの儀式を取材できたのは、取材相手との信頼関係があるからこそだと感じた。番組のケースとは別だが、新型コロナウイルスの感染者が亡くなった場合、遺族はお骨になるまで対面できないことに社会的な関心が集まっているので、新型コロナウイルス感染拡大下で悔いのない別れとはどうあるべきかをテーマに番組を制作してほしい。研究者による歴史的視点からのコメントもとてもよかった。番組の後半では、“湯かん”の仕事を志す若者の姿に感銘を受けた。「子ども時代に母親を亡くす経験を通じて、最後の姿の大切さを痛感した」という話は心に響いた。“湯かん”の広がりに関西の地域性によるものなのか、全国的なものなのか、その点も番組で知りたかった。また、海外のメディアでは、テロや事件事故が起きたときに遺体を映すこともあるが、現場の厳しさを感じさせられるという意義はある。日本の放送局ではどのように考えているのか、知りたいと思った。
- 誰もが避けられない死をテーマに、昨年秋から丁寧に取材した学びのある番組だった。番組の最後に、湯かん師の伊藤千晶さんが「こんなに尊い仕事はないと思います」ということばが印象的だった。ただ、意義のある内容だからこそ、暗いムードで伝えていたのが残念だった。「湯かん師は、入社試験の倍率が30倍の希望者が多い職業」という前向きな話題もあったので、新型コロナウイルス感染拡大下の厳しい時代だからこそ、もう少し明るく伝えてもよかったのではないか。逆さ水の儀の説明があったが、知らない人も多いと思うので、「逆さ」の意味の説明がなかったのが残念だった。映画などで知られている納棺師ではなく、湯かん

師をテーマとして取り上げたのは関西の地域性によるものだったのか。また、関西とそれ以外の地域で“湯かん”に対する考え方や作法の違いについても説明があれば、関西で取り上げる意味が深まったと思う。

- “湯かん”というサービスがあることは知っていたが、亡くなった方の体を身内でなく第三者の方に清めてもらうことにこれまで抵抗感があった。番組からは、専門家の技術で死者を元気なころの姿にしてもらうことで、遺族にとっては後悔の念を薄めてくれる効果があり、死者にとっては旅立ちへのはなむけにもなることがわかった。これからは、死者を少ない人数で見送り、見送る人たちの高齢化も進むと思うので、こうしたサービスを利用するのもよい選択肢だと感じた。番組後半では、湯かん師の伊藤さんから「遺族がしたいだろうことを自分がさせてもらっている」という思いを聞いて、仕事に臨む姿勢がすばらしいと感じた。湯かん師がいなくなったあとの遺族の声も撮影しており、取材スタッフの努力を感じた。今回は死者の見送り方に焦点を当てた番組だが、肉親を通常のように弔うことができないこともあるので、葬儀をとりまく実情に世間の関心が高いと思う。別の番組でも取り上げてほしい。一点気になったのは「今回依頼することにしたのは、ある後悔の念がありました」というナレーションだ。「今回依頼することにしたのは、ある後悔の念からでした」などの表現のほうが文脈のつながりがよかったと思う。
- 今回は紹介していないが、“湯かん”の前に行う、病院の看護師によるエンゼルケアがとても重要だ。この処置が十分でない場合、“湯かん”の際に不都合が生じることもあるので、うまくいったケースのみを紹介しているように感じた。最近、葬儀は遺族の「グリーンケア」として重視されているようだが、“湯かん”は遺族のためのものである一方で、葬儀はあくまで死者の鎮魂のための儀式だと思う。
- 新型コロナウイルス感染拡大の影響で放送が延期されたのかもしれないが、結果的に時宜を得た放送になったと思う。東日本大震災のときに寺や葬儀場、火葬場が被災して、葬儀がなかなかできなかったが、今回の新型コロナウイルスの感染拡大の影響でも、これまでのような葬儀ができなくなる問題も発生した。多くの人が死について考えている時期に、この番組を放送したことは有意義だったと思う。
- 核家族化が進み、出産や人が亡くなる瞬間を子どもと一緒に体験することが少

なくなった時代だと思っていたが、この番組は子どもも命についてしっかりと学べる上質な番組だと感じた。肉親が亡くなったとたん、エンゼルケア、遺体の搬送などが機械的に行われた経験があったので、この番組を見て気持ちが癒やされた。遺族の温かいまなざしのもと、役割を終えた肉体を丁寧に扱ってもらえるのであれば、自分にも“湯かん”を施してほしいと思った。実際には難しいとは思いますが、番組できれいになった顔を見ることができれば、命についての考え方が変わるのではないか。若い湯かん師の「いちばん体を洗いたいのは遺族なので、こんなに尊い仕事はない」という発言に、温かい気持ちになった。一方で気になった点があった。逆さ水の儀について、番組で詳しく説明してほしいと思った。“湯かん”は奈良時代に始まった風習ということだが、具体的にどのように行っていたのかを詳しく知りたかった。また、葬儀で“湯かん”を行う人は50%以上いるという数字を意外に感じた。

○ 以前“湯かん”ということばを映画で知ったが、番組で奈良時代から続く風習だと初めて知り、文化的、歴史的背景に興味を持った。かつてエンバーミングについて知る機会があったが、“湯かん”との違いも知りたかった。近年、“湯かん”を行う割合が50%以上と増えてきていることは、葬儀のあり方が変わってきたからだろうか。高齢化が進む中、家族の思いを大事にしたささやかな葬儀へと変化しているように感じた。亡くなった方は、病院から直接斎場に行く人が多いと知ったので、葬儀に関わるホスピタリティ産業の重要性を感じた。こうした職業は、寺とともに重要な役割を担うと思うが、「グリーンケア」も含め、どのような専門性が必要なのだろうか。ただ、番組で見た死者との別れの場面は明るい印象だったので、現在、新型コロナウイルスの感染により、家族を失った方のことを考えると、今の時期に放送しなくてもよかったのではないかと思う。

○ 考えさせられる番組だった。死者への感謝の気持ちを伝える場所が葬儀であり、“湯かん”ではないかと感じた。子どもころに母親を亡くした若い湯かん師を取材していたが、仕事を通じてさまざまな方の死と向き合うことが、気持ちの整理につながっているのだろうと思った。要望としては、逆さ水の儀はなじみの薄い表現なので、丁寧な説明があったほうがよかったと思う。両親が亡くなった時代には“湯かん”について聞いたことはなかったが、亡くなった方が生前に希望して行うのか、それとも残された遺族が希望して行うのかについて知りたいと思った。

## (NHK側)

当初は3月に放送する予定だったが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、緊急事態宣言の解除後まで放送を待った。新型コロナウイルスの影響で、家族との最後の対面がかなわない方もいることは承知しているが、このような時期だからこそ、見送る遺族が故人にしっかりと思いを伝えられるような平穏が戻ってほしいという願いを番組に込めた。また、“湯かん”の場面の撮影について、取材趣旨を丁寧に説明したうえで、数組の家族を撮影させていただいた。“湯かん”の地域性については、統計データでは関西で際立って多いわけではないが、取材を通じて、“湯かん”を専門とする会社や“湯かん”を知る方が比較的多いことがわかった。また、逆さ水の儀や“湯かん”の起源はなじみが薄いので、限られた時間でも丁寧に伝えることは、今後の課題にしたい。“湯かん”を亡くなった本人が生前に希望したかについては、本人というより、葬儀会社から説明を受けた家族が選択するケースが多いと聞いている。一方で、代々“湯かん”を続けてきた方が、生前にご本人が希望するケースもあるそうだ。今回は、“湯かん”にテーマを絞ったので、エンバーミングなどには触れなかった。遺体をどの程度映すかについては、NHKの放送ガイドラインには、事件や事故、災害などでは、死者の尊厳や遺族の心情を傷つける遺体の映像は原則として使用しないことが規定されている。今回撮影した遺体は、寿命で亡くなった方で、ご遺族からも了承を得ることができたため、放送することにした。遺族が亡くなった人と最後の時間を過ごす大切な儀式を正面から取り上げた番組なので、遺族や“湯かん”の会社と相談してご遺体のお顔以外は、極力モザイク等で隠さず放送することにした。

### <放送番組一般について>

- 5月23日(土)の大阪発リモートドラマ「ホーム・ノット・アローン 完全版」(総合 後9:50~10:00 近畿ブロック)を見た。5月18日(月)~22日(日)(総合 後8:42~8:44 近畿ブロック)に、この2分版のドラマを見かけたときには番組の意図がわからなかったが、10分の番組として見たら、ストーリーが理解できておもしろかった。リモートで出会った男女を主人公に、リモート撮影で制作したド

ラマということで、現実社会でリモート化が浸透していることを実感した。リモートで制作するというドラマの可能性を感じた。

- スマートフォンの画面に慣れたからか、違和感なく番組を見た。ドアノブが取れて閉じ込められたという話から始まったので、外に出るドアが1つしかない家では、防災面で対策が必要だと感じた。一日目、二日目という構成がうまくできていて、絶望した状態から、できることから始めて、新型コロナウイルスの感染拡大下の状況を乗り越えていこうとする、この3か月間を凝縮したようなドラマだった。出演している桜庭ななみさんは見る人を元気にする俳優だが、視聴者の気持ちに寄り添うドラマだと思った。桜庭さんが演じた女性と同様、ステイホームの最中、自身も、自分の仕事を不要不急でいらぬものだと落ち込んでいたが、オーケストラで出番を待つシンバル奏者の話に勇気づけられた。
- とても短かったが、楽しいドラマだった。演劇の世界でも、新しいメディアを使って、どのようなアートにしていくのかが議論になっているが、既存のものをインターネットで配信する方法と、新しい制作手法を用いて制作する方法がある。後者では新しい制作手法を前提とした台本が重要になるが、これからデジタルネイティブと言われる世代による新しいアートが出てくるのだと思う。今回、この試みがタイムリーに行われたが、これからもNHKには特に若いディレクターが中心となって、さまざまなことに挑戦してほしいと思う。過去の番組制作の手法にのみとらわれず、インターネットでの配信も意識したような、実験的な番組を制作してほしい。
- 「オーケストラのシンバル奏者のように、出番になって立ち上がるまで力を蓄えておくことにする」というせりふは、泣かせるせりふだと思った。間違い電話から始まった男女が、リモートで食事をともにするという場面で終わっているが、ハッピーエンドを想像させるストーリー展開だと感じた。仮に片方に悪意があった場合は、悲劇につながる可能性もあるのではないかと感じた。
- NHKでも民放でもリモートドラマが制作されはじめたが、意外と楽しめて引き込まれるものが多かった。民放制作のリモートドラマでSNSの機能や操作をストーリー展開に生かしたものがあつたが、このドラマはシンプルに徹しているのに濃密な10分間で映像の力を感じた。テレビとは縦横比の異なるスマートフォン越し

に展開されるドラマを、テレビで見るという視聴媒体のギャップに、新鮮な感覚があった。客観的な状況は横位置の安定した画面で、反対に登場人物の主観は、縦位置の不安定なアングルで登場人物の心境を繊細に映し出していた。スマートフォン全体を引きで映したり、2画面で対比させたり、あらゆる表現手段を試していた。8ミリフィルムの映画のようなレトロな質感や温かみもあり、最後は字幕も出てきて、リモートなのにとっても丁寧だというギャップもおもしろかった。将来的に新型コロナウイルスの感染拡大が落ち着いてからも表現方法として定着するのか分からないが、テレビにおける表現方法がまだ出尽くしていなかったことが分かるよいドラマだった。

- 思わず笑顔になれる、すてきな番組だと思った。暗いニュースばかりが続く厳しい状況だからこそ、このように前向きになれる番組が求められるとも思う。台本も、出演者の2人も、1本2分という時間設定も、いずれもとてもよいと思った。大阪弁も違和感のない、関西らしい番組にもなっていたのではないかな。今後このような番組を作ってほしい。
- 新型コロナウイルス感染拡大下のオンラインコミュニケーションからヒントを得た、短くてもエスプリの効いたドラマだと思ったが、今後、新しい形が生まれる予感も感じさせられた。若い年代の人たちは、長時間集中してコンテンツを見続けることを嫌がる傾向があると思うので、ミニドラマは、作り方によっては、若い視聴者が好む新しいコンテンツとして発展するのかもしれないと思う。ただ、間違い電話でつながってしまった相手に名前を教えることは現実では無防備だが、フィクションとして受け止めるべきだろうかと思った。音楽を選定するうえで、制作者側の思いや意図があれば知りたいと思った。
- 出演する桜庭さん、松下洸平さんの組み合わせを見たことがあると思ったが、連続テレビ小説「スカーレット」に出演していた2人だった。電話のかけ違いから、見ず知らずの2人が会話をしていくという展開は、私の感覚ではないように思うが、ステイホームの中、若い人たちならありうることなのだろうかとも思った。閉じられた空間を舞台にした、2人の会話だけの短いドラマだったが、一つ一つのせりふに重みがあり、内容も濃かった。余計な音もないので集中できて、続きが見たいと感じた。このドラマを見た人は、ステイホームも悪いことばかりでなく、もう少し頑張ってみようと思ったのではないかな。

- ステイホーム期間中にしか制作できない番組だった。内容としては理解できるが、深みはあまり感じなかった。映像の新しい方向性に自分の感性がついていけないのかとも思った。
- かつては文通や電話、近年ではメールによるやり取りなどがあるが、今風の男女の付き合い方が描かれたドラマとっていいかもしれない。短くて軽いだけに、気楽に見ることができた。BGMがあるロックバンドの楽曲で統一されていたが、場面と音楽、歌詞の関係性があまりわからなかったので、多用する必要はなかったと思う。

(NHK側)

ドラマの中で、「自分の仕事は不要不急なのか」という話もあったが、多くの人がこの数か月間そういう気持ちを抱えて過ごしていたのではないかと思う。NHKのドラマのスタッフも同じような気持ちで過ごしている中、若手のディレクターが発案した企画が制作のきっかけとなった。新しい世代の感覚で生まれた企画を、先輩のディレクターと一緒に、若者で作り上げたドラマだ。

(NHK側)

時宜を得た放送だったという趣旨の意見をいただいたが、この時期は1日1日と状況が変わり、世の中の見え方が変わってくるような状況だったので、制作にあたりスピード感を重視した。このような時宜を得た番組の放送も、スマートフォンを使ってドラマを制作する試みも、続けていきたい。また、「映像表現で、画面の不安定さやバランスの取れなさが心情に表れていた」という意見をいただいたが、こういう状況だからこそ撮れる映像をありのまま表現することで、リアルに感じていただけたところもあると思う。ただ、俳優に演技をしてもらいながら、撮影も全てお願いすることになるので、あまり大きな動きもできないため会話劇になると思い、一番大事なものは脚本だと考えた。選曲について指摘があったが、「人とつながりたい」という思いには普遍性があると思うので、視聴者の中に普遍的にあると思われる音楽を背景に流すことで、その普遍性をドラマの中から感じてほしいと思った。歌詞と内容をリンクさせたつもりではあるが、英語の歌詞で



もあるので、意味までは伝わらなかったのかもしれない。また、物語は、希望を持てる終わり方だったという意見もいただいたが、制作時は、今の状況が解除されてもシビアな現実の中に2人は置かれるので、一緒に食事をしようというような状況にはなかなかならないだろうと思った。だからこそ今つながっている時間を大事にして、希望を持っていきたいという思いでドラマを制作した。

- 6月27日(土)のザ・ディレクソン「i n 奈良」を見た。奈良の魅力を伝える企画をチームで競う番組で、優勝したのは奈良県民おすすめの癒やしのスポットを美しい映像で紹介するという企画だった。観光客がいない今だからこそ、ゆっくりと奈良県の各地を巡り、この土地とともに頑張っていこうと思える番組だった。「人とつながりたい」という願望と地元愛がうまく結びついた番組だと感じた。各地の災害などで沈みがちな昨今、イベントが行われた地域の人たちを元気にし、視聴者の方たちも笑顔にできる番組ではないかと思う。

NHK大阪拠点放送局  
番組審議会事務局